

## 第一次間主観性の発達過程における個人差の研究

著者名(日)	関根 恵, 中野 茂, 近藤 清美, 草薙 恵美子, 山路 めぐみ
雑誌名	北海道医療大学心理科学部研究紀要 : J Psychol Sci
巻	3
ページ	67-71
発行年	2007
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00006847/">http://id.nii.ac.jp/1145/00006847/</a>

---

 <<原著>>
 

---

## 第一次間主観性の発達過程における個人差の研究

関根 恵\*<sup>1</sup> 中野 茂 近藤清美 草薙恵美子\*<sup>2</sup> 山路めぐみ

### Individual differences in an emerging process of primary intersubjectivity

Megumi SEKINE Shigeru NAKANO Kiyomi KONDOU  
Emiko KUSANAGI Megumi YAMAJI

**Abstract :** Innate infant intersubjectivity (IS) has been observed to emerge clearly around the second month after birth. The first IS is called Primary Intersubjectivity (PIS) which is defined by synchronized body movement and proto-conversation between the infant and his/her parent. Although researchers have agreed the fact that IS is an important faculty for infants to consolidate relationship with their affectionate parents, we do not know its emerging process and individual differences in the process yet. In this study, 50 new mothers were asked to make a video-diary by recording their natural interactions with the baby at two, four, eight and thirteen week of infant age. To explore the PI emerging process and its individual differences, three-minute video-clips which included the scenes the infant was attentive to the mother more than 5s or showed active responses to her were extracted from each of video-diaries and infant's PI behaviors were encoded. Results showed that although most infants evidenced PI behaviors until eight week of age, interestingly IP behaviors were not discernible in about 20% of infants even thirteenth week. Therefore, since three month of age, infants may develop through either the pathway of active intersubjective one or rather unsociable one.

**Key words :** 第一次間主観性 (primary intersubjectivity), 母子相互作用 (mother-infant interaction), 個人差 (individual difference), ビデオ育児日記法 (the video-diary method),

#### 【問 題】

乳児が生後すぐに、親密な他者特に養育者に対して積極的に関わりを持つようとする様子は多くの観察者によって確認されてきた (Trevarthen1979, Stern1985, Murray & Trevarthen1985)。特に生後8週くらいからは、より明確な方向性と意図を持って相手と情動を共有しようとし始める。この乳児の変化によりそれまでの非言語的行動 (養育者の方に顔を向ける・口を開ける・手足を動かすなど) が、非言語的コミュニケーションとして養育

者に受け取られる (お母さんがわかるの・これが欲しいの・お話しているのなど) ようになっていく。Trevarthenはこの乳児の変化を生得的なものとしているが、養育者の側の変化も同時に含み、親子の間に間主観的な相互作用が生じて後の対人関係に影響を与えるものと考えられる。

このように第一次間主観性 (Trevarthen1979) の発達には、乳児にとって他者と関係を築く重要な能力と言っても良いが、それは観察する者にとっては驚くような明確な変化と感じられるものである。しかしその変化がどのような過程で発達するのか、その発達には個人差があるのか、さらにこの時期の第一次間主観性の発現の差がはたして後の対人関係を結ぶ能力と関係があるのかなどの点

---

\* 1 北海道医療大学大学院心理科学研究科博士課程

\* 2 國學院短期大学幼児教育科

についてはまだはっきりと分かってはいない。

また、自閉症児においては第二次間主観性の出現に問題があり三項関係が結べないという指摘 (Hobson1993, Trevarthen, et al. 1998) がある。しかし自閉症の中核となっている障がいである社会的相互作用における問題はむしろ人に対する関心や動機付けの低さであり、第一次間主観性に関わる問題であると言える。さらに言語発達においては遅れを生じないアスペルガー症候群では、対人関係での多くの問題が指摘されている。そこで、果たして乳児初期の第一次間主観性の発達がその後の対人関係の発達に影響するのか、途中までは大きな差が無く発達した後逆V字型に発達が障がいされるのか、またそれが第二次間主観性の発達とどのように関係しているのかを調べることは大きな意味があると思われる。

そこでまず、生後2週から13週前後の乳児と養育者の相互作用の観察を通して第一次間主観性の発達過程を記述することを目的として調査を行った。

## 【方 法】

1. 研究協力者：札幌交差文脈縦断研究に参加していただいている母子50組（第一子：女児26名・男児24名）。母親教室においてビデオによる育児日記を撮影するという事で研究協力者を募った。参加者は2004年から2007年まで随時募集され57名の希望者があった。最後まで継続して協力していただいた母子は50組で、他は引越や母親の復職などの都合により最後まで継続できなかった。

2. データ収集方法：家庭において母子のやり取りの様子をビデオ撮影していただくよう依頼した。時期は生後2週・4週・8週・13週とし、なるべくその週齢に達した後1週間以内に乳児の機嫌の良い時を見計らって、画面に母子両方が入るように家庭での撮影をお願いした。回収された映像は、ほとんど母子のやり取り場面であったが、父親が主に育児を担当していた家庭が一組あり、ここでは父子のやり取り場面を用いることとし

た。都合で撮影できず欠損したデータは8週以外の各週で、3～4ケースあった。

3. 分析方法：撮影された映像の中から、最初の母子のやり取り場면을3分間抽出した。その中で母親に対して（母親に視線を向けている状態の）乳児のとった行動から、第一次間主観性を示すと考えられる行動（母親に対する5秒以上の注視・乳児模倣・手や足の動き・口の動き・微笑む・声をたてて笑う・クーイング・原初的喃語の発声）の有無を評定した。また、発達心理学を専攻している大学院生が全体の20%を評定し、 $\kappa$ は.64であった。

さらに、注視・模倣・手足や口の動きが見られれば1点、微笑ないしクーイングが見られれば1点、笑わないし発声が見られれば1点を与え、さらに乳児と母親のやり取りにターンテイキングが見られたか、乳児からの能動的働きかけが見られたか（各1点）などの点から第一次間主観性の出現の状態を評定（primary intersubjectivity得点：以下PIS得点：0～5）した。

また、13週において、初めて見るおもちゃをどのように乳児に提示するかによって評定された母親の遊戯性（playfulness：母親が子どもの気持ちと同じように楽しんで関わっているか）と感受性 sensitivity（中野 2007）の値との相関を取った。

## 【結 果】

各週齢において第一次間主観性を示す行動をとった乳児の割合を表したのが、図1である。これによると母親と乳児のやり取りは各週齢で発達に違いが見られる。生後2週の乳児は主に母親の顔を注視すること、そして手足を動かしたり口を開けたりすることで、関わりを持っている。しかし、この時期同じくらい良く観察された乳児模倣は週齢が進むにつれ、どんどん減少し、13週ではほとんど見られなくなっている。第一次間主観性が出現すると言われている8週になると、微笑とクーイングがほぼ同じくらいの出現数で増加し始

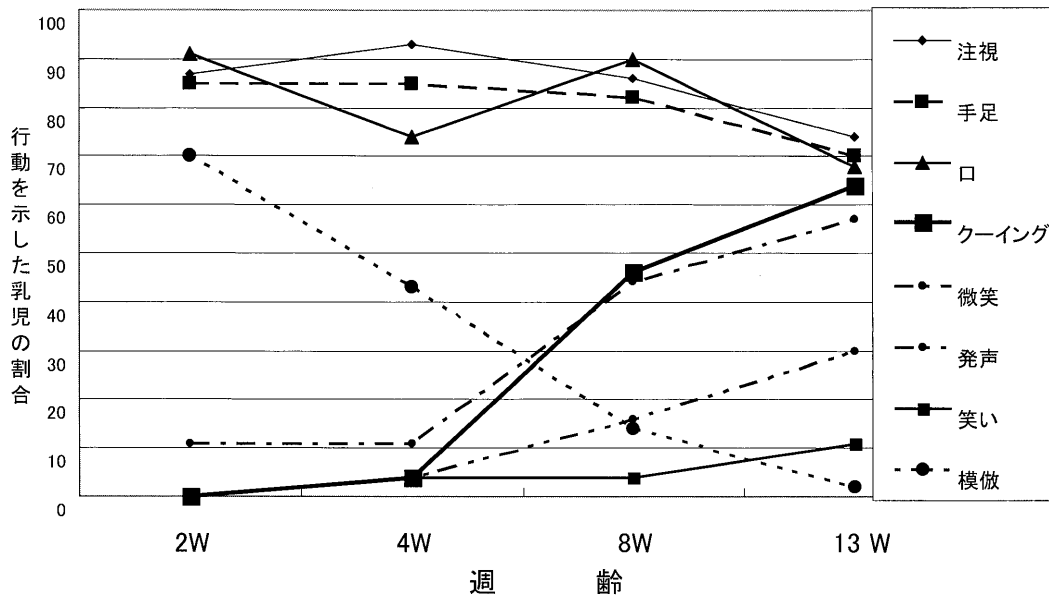


図1 乳児の社会的行動の発達

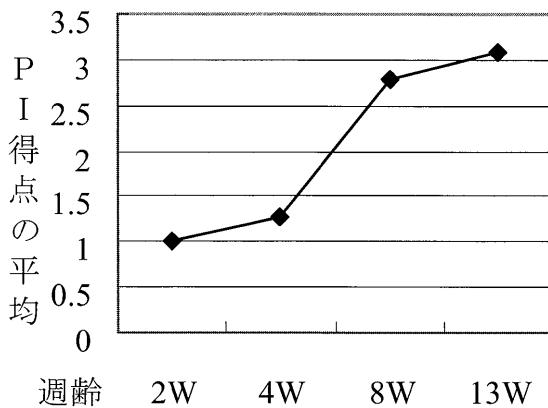


図2 PIS得点平均の変化

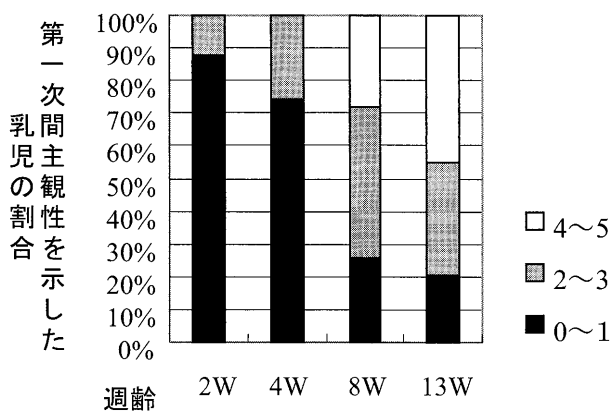


図3 乳児の間主観性の変化

める。さらに13週になると笑いと発声が増加し始め、注視や手足・口の動きは減少傾向を示している。

以上の点から、PIS得点として4週までによく出現する行動、8週で出現する行動、13週で出現

表1 PIS得点と3ヶ月時の母親のsensitivityおよび遊戯性との相関

	母親の遊戯性	母親のsensitivity
PIS得点	-.037	-.223

N=27

する行動にそれぞれ1点ずつを与えることにした。

また、各週齢におけるPIS得点の平均を算出し(図2)、PIS得点で3群に分けた乳児の割合の変化を示した(図3)。

PIS得点は4週から飛躍的に高くなり、8週までに第一次間主観性が成立していく過程が明確になった。さらに、8週から高いPIS得点を示す乳児の割合が高くなっていく様子が見えたと、その一方で、13週においても約2割の乳児が第一次間主観性を明確に示さない状態も観察され、この頃から母親と積極的に相互作用を図ろうとする乳児と、そのmotivationが比較的弱い乳児の間に個人差が現れてきていることが示された。

また、この時期の母親の遊戯性playfulness・感受性sensitivityとPIS得点との間でSpearmanの順位相関を算出したが、無相関であった(表1)。

## 【考 察】

2か月前後に乳児と養育者のコミュニケーションの質が大きく変化する様子は2-month transition (Lavelli & Fogel 2005) として関心を集めている。しかしこの変化は観察する者には急速で劇的に感じられるが、実際はいくつかの複合的な段階があることが示された。第一次間主観性の発達はコミュニケーションをとるツールとしての身体器官の成熟に伴って養育者に向けて階層的に統合されていく。それは、明確な方向性と焦点化、さらに相互性によって特徴づけられる。重度の自閉症児・者においては、他者と（時には養育者と）の間に温かな情動的交流が見られず、目と目を合わせ微笑することが困難である (Hobson 1993) とされている。また、発声は叫喚のみであることも少なくない。しかし他者と関係性が築かれるに従って合視が出てきたり、微笑みや声を出して笑ったりできるようになってくる。身体器官が成熟した後でも関係性において発達が見られない場合はこのような行動が見られないということは、これらの行動が第一次間主観性を反映する指標として適当であると考えられる。

そこで、PIS得点は13週までに養育者と関わろうとする乳児の第一次間主観性を反映していると考えられるが、本研究においてはこの時点で既に個人差が見られることが明らかになった。8週から乳児の行動ははっきりと養育者に向けてコミュニケーションを希求するものとなっていく。それは単に空腹になったからとかオムツが濡れたからというような生物的な欲求だけではなく、養育者とのコミュニケーションを積極的に希求しそれを楽しみたいという動機付けが明確になってくるのである。そこに動機付けが強い乳児と比較的弱い乳児がでてくる状況が示された。その一方で、この時期の母親の遊戯性と感受性との相関が見られなかったことは、Trevarthenの言うように、第一次間主観性が生得的なもので母親の関わり方に関係なく出現する可能性を示唆している。

しかし、鯨岡 (1997) も記述しているようにこの時期からの親子のやり取りは、どちらかの一方的なものではなく、相互に調整し合うものである。それは乳児の発達に応じて時にはそれを支え、時にはそれを引き出すような養育者の間主観性と無関係ではないと思われる。今回は親子の相互作用の質までを含めた分析を行っておらず、今後の課題と言えよう。

本研究は研究協力者を縦断的に追跡しており今後第一次間主観性の発達における個人差がどのように第二次間主観性に影響するか、またその後の社会性の発達に影響するのか、引き続き調査していくことになる。また、乳児の第一次間主観性の発達によっては、養育者の側の親としての効力感低下や無力感からくる抑うつと関係することも考えられる。そこで、乳児期早期から養育者への介入を行うことが親子の相互作用を変化させる可能性もある。さらに他者と情動や体験を共有することが困難と言われている自閉症スペクトラムの中核的問題に直接介入することが可能であるのかについては、さらなる調査と分析が必要である。

## 【謝 辞】

本研究にご協力いただいたお子さんとそのご家族に感謝いたします。本研究は、独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金（研究代表者：中野茂，研究課題番号19530594）の助成を受けた。

## 引用文献

- ホブソン, P.R. (2000)「自閉症と心の発達：「心の理論」を越えて」 木下孝司監訳 学苑社  
(Hobson, R. P. (1993). *Autism and the development of mind*. Hove, Sussex : Erlbaum.)
- 鯨岡峻 (1997). 原初的コミュニケーションの諸相 ミネルヴァ書房
- Lavelli, M. & Fogel, A. (2005). Developmental changes in the relationship between the infant's attention and emotion during early face-to-face communication : the 2-month transition. *Devel-*

*opmental psychology* 41, 265–280

- Murray, L. & Trevarthen, C. (1985). Emotional regulation of interactions between two month-olds and their mothers. In T. M. Field & N. A. Fox (Eds), *Social perception in infants* (pp.177–197). Norwood, NJ : Ablex
- 中野茂 (2007). 4 か月児の社会的随伴性の弁別に及ぼす親の遊戯性の効果 異なる保育環境におかれた乳児の適応を規定する要因の研究 平成16年～18年度科学研究費補助金 (基盤研究C研究 (2)) 研究成果報告書 (課題番号16530432) 35–59.
- スターン, D.N.(1989). 乳児の対人世界—理論編, 臨床編 小此木啓吾・丸田俊彦, 監訳・神庭靖子・神庭重信訳 岩崎学術出版社 (Stern, D.(1985). *The interpersonal world of the infant*. New York : Basic Books.)
- Trevarthen, C. (1979). Communication and cooperation in early infancy. A description of primary intersubjectivity. In M. Bullowa (Ed.), *Before speech : The beginning of human communication* (pp.321–347). London : Cambridge University Press.
- トレヴァーセン, C., エイケン, K., パプーディ, D&ロバーツ, J. (2005) 自閉症の子どもたち—間主観性の発達心理学からのアプローチ—中野茂・伊藤良子・近藤清美監訳 ミネルヴァ書房 (Trevarthen, C., Aitken, K., Papoudi, D & Robarts, J. (1998). *Children with Autism 2nd edition Diagnosis and Interventions to Meet Their Needs*. Jessica Kingsley Publishers.)